

『源氏物語』 「賢木」 卷の五壇の御修法

—— 桐壺院の靈出現の可能性をめぐる ——

春日美穂

はじめに

『源氏物語』 「賢木」 卷において桐壺院が崩御する。桐壺院崩御直後から語られる、新帝・朱雀帝の若さと、それによる「祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世」(「賢木」二一九八頁)への不安が急速に御世を覆っていく。そのような変化とともに、除目において光源氏を頼る者が急激に減るという形(「賢木」二一〇〇頁)で、光源氏が不遇な立場になっていく様子が描かれる。

しかし、そのようななかで光源氏は、朧月夜と密会するという大胆な行動に出る。

わづらはしさのみまされど、尚侍の君は、人知れぬ御心し通へば、わりなくもおぼつかなくはあらず。五壇の御修法のはじめにてつつしみおはします隙をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。かの昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れたてまつる。(「賢木」二一〇四～一〇五頁)

「例の」と、ふたりの密会が度重なっていることが語られる。しかも、その密会は、「五壇の御修法」の、朱雀帝が「つつしみ」の状態にある最中であつた。光源氏は、女房の中納言の君の手引きにより、「かの昔おぼえたる細殿の局」と、

かつての朧月夜との密通を思わせる弘徽殿の細殿から朧月夜のもとを訪れる。夜明け前には、「宿直奏さぶらふ」〔賢木〕二一一〇五頁〕と、宮中の光景が描かれており、光源氏と朧月夜の密通は、五壇の御修法で「人目もしげき」〔賢木〕二一一〇五頁〕なか、行われたことがはっきりと描かれている。

朱雀帝の即位にともない、朧月夜は弘徽殿に住まうようになっていた。

後は、里がちにおはしまして、参りたまふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には尚侍の君住みたまふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れ晴れしうなりて、女房なども数知らず集ひ参りて、いまめかしうはなやぎたまへど、御心の中は、思ひの外なりしこともを、忘れがたく嘆きたまふ。

〔賢木二一一〇一頁〕

姉弘徽殿から殿舎を譲り受けたということはもちろんあるが、弘徽殿は清涼殿から直結する有力な後の住まう場所であったことから、朧月夜が将来后になることが囑望され、かつ、現在も実質的な朱雀帝の第一の皇妃であることは明らかである。

「五壇の御修法」については、新編全集頭注が、「帝や国家の重大事に行う修法。ここでの重大事が何かは不明」〔賢木〕二一一〇四頁〕と注をふしている。『仏教語大辞典』（小学館）もまた、「天皇や国家の重大な祈りにこれを行い、息災・増益・調伏等に修する」と指摘しており、光源氏と朧月夜との密会は、国家的な重大事の最中であることが浮かび上がる。『源氏物語』中で、五壇の御修法の用例は本場面のみであり、その点においても、物語全体の中でも重大な事態が差し迫るなかでの密会であったことが理解される。そのようななか、第一の皇妃の密通が描かれるという大変不穏な場面となっているのだ。³⁾

また、中古の文学作品を見ても、五壇の御修法が描かれることは大変少なく、『源氏物語』が五壇の御修法を描いた意味は重いとはいえるのではないだろうか。

本論では、「賢木」巻における五壇の御修法について、物語文学、歴史資料における五壇の御修法を検討することをおして、桐壺院の霊が「賢木」巻の段階より出現していた可能性について検討したい。

一、平安期の文学作品における五壇の御修法

前述したように、平安期の作品において五壇の御修法が描かれる場面はそれほど多くない。当時の人々のとらえ方がよくわかるのが『枕草子』の例である。

きらきらしきもの 大将、御さき追ひたる。孔雀経の御読経、御修法。五大尊のもの。御齋会。藏人の式部丞の白馬の日、大庭練りたる。その日、靱負佐の摺衣破らする。尊星王の御修法。季の御読経。熾盛光の御読経。

(新編日本古典文学大系『枕草子』第二七六段 四三二頁)

「五大尊のもの」が、五壇の御修法を指していることを、新編全集頭注が指摘している(四三〇頁)。宮中で行われる様々なもののなかで、「きらきらしきもの」、すなわち、「威厳があつて堂々として立派である」(『日本国語大辞典』第二版 小学館)もののなかに五壇の御修法が挙げられている。五壇の御修法が、当時の人々にとって、効果もさることながら、その威厳のある様子についても心ひかれるものであつたことが浮かび上がる。

実際に五壇の御修法が行われた記述としては、『紫式部日記』における、彰子の敦成親王誕生の際の五壇の御修法が代表的なものとして挙げられる。

また夜ふかきほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まありなばや」「女官はいままでさぐらはし」「藏人、まぬれ」など、いひしろふほどに、後夜の鉦うちおどろかして、「五壇の御修法の時はじめつ。われもわれもとうちあげたる伴僧の声々、遠く近く聞きわたされたるほど、おどろおどろしく、たふとし。

観音院の僧正、東の対より、二十人の伴僧をひきぬて、御加持まぬりたまふ足音、渡殿の橋の、とどろとどろと踏み鳴らさるるさへぞ、ことごとこのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場の御殿、浄土寺の僧都は文殿などに、うちつれたる淨衣姿にて、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間を分けてかへり入るほども、はるかに見やる心地して、あはれなり。さいさ阿闍梨も、大威徳をうやまひて、腰をかがめたり。

この例は、同じく彰子の敦成親王誕生を描いた『栄花物語』にも描かれている。
 (新編日本古典文学全集『紫式部日記』一二四頁)

ほど近うならせたまふままに、御祈りども数をつくしたり。五_{大尊}の御修法おこなはせたまふ。さまざまその法にしたがひてのなり有様ども、さはかうこそはと見えたり。観音院の僧正、二十人の伴僧とりどりにて御加持まゐりたまふ。馬場の御殿、文殿などまでみなさまざまにしみつ、それより参りちがひ集るほど、御前の唐橋なごを、老いたる僧の顔醜きが渡るほども、さすがに目たてらるるものから、なほ尊し。ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡り、木の間を分けつつ帰り入るほども、はるかに見やらるる心地してあはれなり。心誉阿闍梨は、軍荼利の法なるべし、赤衣着たり。清禅阿闍梨は大威徳を敬ひて腰を屈めたり。仁和寺の僧正は孔雀経の御修法をおこなひたまひ、とくとくと参りかはれば、夜も明け果てぬ。

(新編日本古典文学全集『栄花物語』巻第八「はつはな」一一三九八頁)

二十人の伴僧を伴う大がかりなものであり、彰子出産にかける道長の願いが伝わるものである。しかし、この例が『源氏物語』の例と大きく違うのは、主催者が藤原道長であり、臣下が行っているという点である。場所も宮中ではなく土御門殿である。彰子は中宮であり、その出産は確かに国家的な行事であるといえよう。一方で、道長の邸宅で行われており、そこに一条帝がどのようにかかわったかは記されていない。この五壇の御修法について、森茂暁氏は「藤原氏の私邸における五壇法修法の最初で、しかも御産御祈として五壇法の初例であることが注目される」と述べられている。

『栄花物語』には、ほかに二例の五壇の御修法の例がみられる。一例目は頼通の病が治らずに行われたものである。しかし、実際には五壇の御修法が行われた記述はなく(新編全集頭注)、『栄花物語』の独自の設定となっている。

日ごろ過ぐるにその験なし。さらに御心地おこたせたまはねば、今はずちなしとて御修法五壇はじめさせたまふ。二十日ばかりに、その験けざやかならず、御物の怪ども出で来てののしる、大殿にも出で来る例の御物の怪

とぞいふなる。

(巻第十二「たまのむらぎく」二一―五九頁)

当初、原因は「神の気」であるとされ、「御祭、祓」(巻第十二「たまのむらぎく」二一―五八頁)が行われたが効果がなく、「今はずちなし」、すなわち、最後の手段として行われたのが五壇の御修法であるという筆致からは、五壇の御修法の持つ威力を信じる人々の心証があらわれている。しかし、五壇の御修法も効き目がなく頼通は危篤に陥る。その理由が、頼通が三条天皇女禎子内親王の降嫁を受けることになったことについて、頼通室の隆姫を思う、父具平親王の物の怪であると明らかに成り、道長が降嫁をとりやめることを約束することで、頼通は平癒する。以上のように、この五壇の御修法の例は、藤原道長家族の私的なものである一面も強い。

二例目は、患う妍子の快癒を祈る際に行われたものである。

御前には、白き御衣二つ三つ奉りたるに、御色も同じやうにて、ただひたみちに白うおはしまして、御髪は押しくだして結はせたまへるままに、結目のほどは乱れて、それより下はつゆ乱れさせたまはず、こよなく長く見えさせたまふは、かく苦しなからも生ひさせたまふなんめりと、ありがたくみえさせたまふ。さて渡らせたまひて、五大堂の東の廂、北面かけておはします。殿の御前は、この同じ御堂の戌亥の方の間におはします。宮の侍には、大御堂の北の廂に屏幔引きてぞしたる。御修法五壇始めさせたまへり。(巻第二十九「たまのかざり」三二―三四頁)

妍子の様子は「ひたみちに白」く、苦しげな様子である。妍子は中宮ではあるが、この例もまた一族の一員の病によるものである。なお、この五壇の御修法については、妍子崩御後に、この際の願をもとにしたと考えられる「五大尊」が造られている(巻第二十九「たまのかざり」三一―三九頁、一四〇頁)。

頼通と妍子の例は、大納言と中宮の病ではあるものの、一方で道長一家の家族の問題でもある。そのように考えると、物語文学が描いた五壇の御修法のうち、本来的な国家の危機に際して行われたものは、『源氏物語』の朱雀帝の御世のものだけであるといえるのだ。

二、史実における五壇の御修法

以上、物語文学における五壇の御修法について確認してきた。それでは、史実における五壇の御修法はどのようなものであるか。史実の五壇の御修法については、前述の森茂暁氏に詳細な調査があり、また、浅尾広良氏も整理を行っているため、詳細は二氏の調査に譲りたい。浅尾氏は、一条天皇の御世、寛弘五年（一〇〇八）までに行われた五壇の御修法について、「天皇（もしくは天皇を代行する摂政）の病氣平癒や出産など貴人の体調と関わる例」と「天下安穩など国家の危機的状況と関わる例」であると分類されている^⑧。浅尾氏は、帝の病を、他の者の病や出産と同じカテゴリーとして分類しているが、帝の病とは、後述する醍醐天皇の例に明らかのように、讓位や崩御と結びつく可能性のあるものであり、国家の危機的状況と考えるべきであろう。

そのように考えた際、前述した彰子の例は、病氣平癒や出産に関わる例にあたる。そのほかにも永祚元年一条天皇の摂政、藤原兼家の病の例^⑨、長徳三年太皇太后昌子内親王の病の例^⑩があげられる。

一方、後者の例にあたるのは、史実における五壇の御修法の初出である、延長八年七月二一日に行われた醍醐天皇の御世のものである。

廿一日。請天台阿闍梨五人於常寧殿^一。調備五壇修法^二。

（新訂増補国史大系『日本紀略』後篇一 延長八年（九三〇）七月廿一日 一二九頁）

延長八年は、正月八日に伊予権守源悦が薨去、一三日には前斎院敦子内親王が薨去、二月二四日には前年の大風と洪水、及び、流行中の疫病により大赦がなされている。さらに、二月二八日には式部卿敦慶親王が薨去、三月九日は儼子内親王が薨去、五月一五日には権律師貞勝が亡くなっており、多くの人々が亡くなる年となっている。そして、五月六月は、「雨不_レ降」と雨が降らない状態となる。六月二六日には「各議請雨之事」ののち、清涼殿に落雷が起こり、藤原清貴、平希世が亡くなる。紫宸殿では美努忠包が亡くなり、紀蔭連、安曇宗仁が負傷する事態となった。

これにより醍醐天皇も体調を崩していく(二九頁)。春からの疫癘は夏になってもおさまらず、醍醐天皇は七月二日に清涼殿から常寧殿にうつるが、一日より「御咳病」を発症する。五壇の御修法は、この流れのなかで、七月二一日に行われたのであった。

しかし、この後の九月二二日に醍醐天皇は讓位、二九日に崩御している。

人々の死、気候不良から清涼殿への落雷と公卿の死、疫癘、帝の病という、まさに国家的な危機に際し、初めて五壇の御修法の記載が見られるという点に、五壇の御修法の威力と、それが行われる事態の深刻さを示す例となっている。

後者の例にはほかにも、天慶三年(九四〇)に行われた、いわゆる承平天慶の乱にかかわるもの、前年に疫癘の流行、九月二三日に「内裏焼亡」のため改元された応和元年(九六一)に行われたもの、「於禁中為消御薬」、すなわち冷泉天皇病のために行われた康保四年(九六七)のもの、三日後の『日本紀略』に、「天皇不豫」に際しての修法の驗力のため、僧正良源が輦を許されたと記録される天元四年(九八一)のものが挙げられる。

特に醍醐天皇の例、朱雀天皇の例は深刻だが、康保の村上天皇の例も、内裏焼亡を受けている点で、国家的な事態とかわつている。

これらのことをふまえたとき、朱雀帝の御世の五壇の御修法においても、帝か帝の周辺人物の体調にかかわる問題か、国家の危機的状況のどちらかの理由によって行われたと考えることができる。さらに、彰子出産の折の五壇の御修法は土御門殿で行われており、『源氏物語』の五壇の御修法が宮中で行われていることを考えると、後者の理由、すなわち国家的危機に際して行われたものであることが確定できるのである。

それでは、朱雀帝の御世が抱えた国家的危機とはいかなるものであったのだろうか。

三、朱雀帝の御世の「五壇の御修法」

朱雀帝の御世で行われたと描かれる五壇の御修法は、大変威力のあるものとして重視されていることは前述した。それでは、その威力とは具体的にどのようなものであったのだろうか。速水脩氏は、五壇の御修法の調伏法としての役割に着目されている。速水脩氏は、『四十帖決』の、「修スルニ調伏ノ法ヲ五大尊之中不動大威徳ハ是通例也」（大正新脩大藏經『四十帖決』No二四〇八 七五卷九一八頁下）などの記述から、五壇法の調伏法としての面を指摘し、「五壇法は上流貴族にとつてもつとも切実な物怪調伏の欲求と結びついて流行するようになった」と指摘される。¹⁷⁾

事実、『紫式部日記』の彰子出産の場面において、五壇の御修法などの修法の効果により、「御物の怪どもかりうつし、かぎりなくさわぎののしる」（一三〇頁）と、多くの物の怪が出現していることが描かれている。

史実においても、醍醐天皇の例は菅原道真の怨霊を鎮めるためのものである。冷泉天皇や村上天皇の病の例も、病の原因となる物の怪等の存在が意識されていたといえよう。そのことを考えた際、「賢木」巻の五壇の御修法も、ならかの物の怪などの災厄の調伏を目的としていたといえるのではないだろうか。そして、「賢木」巻において想定される物の怪、それは、桐壺院の可能性があるのではないだろうか。

松井健児氏が、このことについてすでに、「右大臣勢力が、桐壺院霊をそのままに怨霊と見なすとは思われぬものの、すくなくともこの時期に祓われるべき霊とは、現勢力に強力な威圧としてのしかかっている何者かであることは確かであろう。（中略）表面的には何も語られてはいないものの、ここには確かに右大臣勢力の桐壺院霊に対する穏やかではない意思が認められるであろう」と指摘されるところではある。しかし、歴史上の五壇の御修法がすべて実際の災厄が起こつたうえで行われていることは注目される。このことを考えると、朱雀帝方には、五壇の御修法という強力な調伏法を行おうと考える具体的な動機があつたはずなのである。状況から考えるに、それは、桐壺院の霊の出現がすでに起こつていたということではなかったか。五壇の御修法を行うこと事態、行わなければならない不安

材料を抱えていることを世間に明らかにしてしまふことでもある。それを、即位して一年にも満たない時期に行ったという事実は、「桐壺院霊に対する穏やかではない意思」であるというよりは、やはり具体的な出現、あるいは出現に類するものがあつたと考えられるのではないか。

五壇の御修法が行われたのは、以下のように、朱雀帝の桐壺院の遺言違背が語られた直後である。

帝は、院の御遺言たがへずあはれに思したれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし。母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず、世の政御心にかなはぬやうなり。
〔賢木〕二一一〇四頁

朱雀帝自身には遺言を守りたいという気持ちはあるが、一方で、守れていない状況があることが描かれる。前後に体調不良などの記述はなく、五壇の御修法を行ったことの原因としてあてはまるのは、桐壺院の遺言違背だけである。さらにいえば、桐壺院の崩御後の朱雀帝の記述については、祖父右大臣による専制〔賢木〕二一九八頁)、予測される光源氏や藤壺の不遇〔賢木〕二一九八頁)、光源氏の寂寥〔賢木〕二一〇〇頁)、朧月夜の様子、そして、左大臣が世を嘆いて参内しないことである〔賢木〕二一一〇二頁)。桐壺院に近い人々の不遇と桐壺院の遺言が守られていない状況が描かれ続けているのである。その後、齋院に朝顔の姫君が選ばれたことが描かれたのち〔賢木〕二一一〇三頁)、あらためて、桐壺院の遺言違背が描かれ、五壇の御修法へと続いていく。この物語の筆致からは、おのずと五壇の御修法の背景に桐壺院の遺言違背と、五壇の御修法を行わなければならない事態、すなわち、遺言違背による桐壺院の霊の出現が読み取れるといえよう。後の朱雀帝の夢に桐壺院があらわれる場面は、「雷鳴りひらめき」〔明石〕二二二五頁)と、雷が描かれる。雷は、史料の五壇の御修法の初出例である醍醐天皇の例と共通している。この場面について『岷江入楚』が、「おほやけのさとしの事菅丞相左遷して薨せられし後内々に種々の怪異あり又かみなりの事も延長の霹靂などいふ事思ひなそらへらるゝ也」²⁰⁾と指摘しているように、菅原道真の例を想起させる効果をはたしている。²⁰⁾菅原道真を鎮めようとするための五壇の御修法と、『源氏物語』の五壇の御修法とが重なりあい、

「賢木」巻に、すでに鎮めなければならぬ桐壺院の霊の存在があることを示しているのだ。

このことを考えるうえで「示唆的なのは、実際に朱雀帝の夢に桐壺院が出てきた際の弘徽殿大后の対応である。

「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。
(「明石」二一―二五二頁)

朱雀帝が、桐壺院の霊があらわれたという衝撃的な事実を告げたにもかかわらず、それは「思ひなしなること」で、「思し驚くまじきこと」であると告げている。冷静なその対応からは、もちろん騒ぎ立てて問題を大きくしないというところがあるだろうが、一方で、桐壺院の霊の出現を予測していた、あるいは経験していたかのような冷静さがあるといえよう。「賢木」巻で、行われた五壇の御修法は、桐壺院の霊を鎮めるという明確な目的があったのである。

以上のように、朱雀帝は、桐壺院の霊の出現に対し、いちはやく対応していたといえる。しかし、そのさなか、光源氏と朧月夜の密通が描かれる。三苦浩輔氏は、「御修法のさなかに、これも古代風に言えば物忌のさなかに、あだし男を引き入れて逢っているのであった。これでは帝にふりかかる災難邪気の払われようはずがない。むしろ神仏の怒りにふれるであろう」と指摘され、河添房江氏も、「事が露顕すれば、光源氏は政治的失脚をまぬがれないが、それが須磨流謫という形で現実路線になる以前に、はやくも朱雀朝は巫女を侵犯され、その脆弱さをさらけ出しているということになるうか」と指摘される²²⁾。以上の指摘をふまえれば、朱雀帝が行った五壇の御修法にはほころびがあったといえる。高田祐彦氏は、「賢木」巻の光源氏について、「困難な相手だからこそなお一層ひかれざるをえない源氏のあり方そのものが、体制の枠を超える存在として根源的に反逆だといわねばならないのである」と指摘される²³⁾。朱雀帝は、父、桐壺院の霊という存在と、その父、桐壺院に愛され、守られ、そしてそのことそのものが朱雀帝の御世を脅かすこととなる光源氏とを抱え込みながら、なんとか仏教行事によって御世を守ろうとする。「賢木」巻の五壇の御修法は、桐壺院の霊の出現が「須磨」巻以前から起こっていた可能性と、それに対して仏教的行事で鎮めようとする朱雀帝の攻防が現れた場面であったのだ。

四、朱雀帝の御世の「仁王会」

朱雀帝が、桐壺院の霊を鎮めるために行ったのは五壇の御修法だけではなかった。

「京にも、この雨風、いとあやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし。内裏に参りたまふ上達部なども、すべて道閉ちて、政も絶えてなむはべる」など、はかばかしうもあらず、かたくなしう語りなせど、

〔明石〕二―三三四頁

「明石」巻は、「なほ雨風やまず、雷鳴り静まらで日ごろになりぬ」〔明石〕二―三三三頁〕と天変がうち続く状況からはじまる。そうしたさなか、京の紫の上のもとから送られた使者が語ったのが上記の場面である。宮中で「物のさとし」による「仁王会」が行われるだろうというものである。仁王会自体の歴史上の事例は多いが、着目すべきは、中古の文学作品で仁王会が登場するのが本場面のみであるということである。内田敦士氏は、「臨時仁王会に特徴的なのは、現在の災害・怪異状況を詳しく述べた上で、除災・防災を祈願するという点である」と指摘されている。朱雀帝は、まさしく五壇の御修法によって桐壺院の霊の鎮めを試み、それでもおさまらない「災害・怪異」の「除災・防災を祈願」して仁王会を行っているといえよう。河添房江氏が、「危機に際して、鎮護国家の仏教行事で切り抜けることを方針とするのが、どうやら朱雀王朝の特徴になつていらしいことは注意される」と指摘されるとおり、朱雀帝の御世と仏教行事は不可分の関係にある。

一方、それに対抗するかのような光源氏の姿がみられる。

春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊きことどもをせさせたまひなどして、またいたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り、韻塞ぎなどやうのすさびわざどもをもしなど心をやりて、宮仕をもをさをさしたまはず。

〔賢木〕二―三三九―一四〇頁

世に用いられない博士たちを集め、宮中の季の読経を自邸で行う光源氏の姿が描かれる。⁽²⁶⁾朱雀帝の、仏事によって御

世を正常に戻そうとする営みに対抗するかのようである。光源氏は臙月夜を侵犯し、帝の仏事を侵犯する。朱雀帝は、そうした光源氏との相克を抱え、なんとか対応しようと試みながらも、光源氏の須磨流謫、そして、桐壺院の霊の登場にいたってしまっているのである。

おわりに

以上、『源氏物語』「賢木」巻における五壇の御修法について検討してきた。物語文学において、五壇の御修法が描かれることは少なく、描かれているということ事態、着目すべきである。『枕草子』にあるように、五壇の御修法が、威厳のあるものとして人々の心に残りやすかったということがある一方で、当時の五壇の御修法に対する調伏法としての効力を考えた際、『源氏物語』についても、桐壺院の霊の出現がすでに「賢木」巻から少なくともその萌芽があったと考えるべきである。朱雀帝は、予測される危機にいち早く対応し、五壇の御修法という形でそれを回避しようと努力しているのである。

しかし、その五壇の御修法の最中、臙月夜と光源氏は密通するのであった。五壇の御修法は完成しなかったといえよう。高橋麻織氏は、「右大臣家の政治的敗北の原因は朱雀朝の後宮政策の失敗であり、それは光源氏との恋愛に係づけられているのである」と⁽²⁷⁾とされる。

朱雀帝の御世は五壇の御修法後もおさまらず、その後、雷が鳴りやんだ朝（「賢木」二一一四頁）に、ついに臙月夜と光源氏との密会が明らかになる。弘徽殿太后は、「このついでにさるべきことも構へ出でむによきたよりなりと思しめぐらすべし」（「賢木」二一一四九頁）と考え、光源氏は須磨に流謫する。ある意味で、朱雀帝の御世をおびやかす存在は去ったといえるが、仁王会を行わざるを得ない事態、そして、桐壺院の霊の出現の明文化、朱雀帝の

讓位と物語はすすんでいく。この間の朱雀帝については無力さを嘆く場面が多出するが、一方で、きちんと仏事を行い、光源氏の帰還を自ら決定していることは着目される。袴田光康氏が、「父院の崇りを恐れるだけならば、追善供養でも事は足りよう」と指摘されるのは重要である。仏事によって御世を保とうとし、かつ、「賢木」巻から桐壺院の靈の出現が推測される状況であるため、「明石」巻でもまた仏事を行うことで乗り切ろうとすることもできたはずである。しかし、帝としての最後の決断として光源氏召喚を行う朱雀帝からは、適切なタイミングで仏事を行い、御世の維持を保とうと心がけ、一方で、極限の場面では仏事に頼るだけではない決断を行う帝としての姿が浮かび上がってくる。「賢木」巻の五壇の御修法は、朱雀帝の帝としての資質を浮かび上がらせるものとしてもあつたのだ。

註

- (1) 『源氏物語』の本文の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集により、巻名・巻数・頁数をふす。傍線等は適宜補っている。
- (2) 『国史大辞典』（吉川弘文館）も、「主として宮中公家において安産・除病・除障を祈るため息災法や増益法・調伏法によって修せられた」としている。
- (3) 浅尾広良氏は、朱雀帝を死などの災厄から守るための修法であつたと指摘される（『朱雀帝御代の始まり―葵巻前の空白の時間と五壇の御修法―』『源氏物語の皇統と論理』翰林書房 二〇一六年）。
- (4) 森茂暁氏「五壇法の史的研究」（九州文化史研究所紀要）第三九号 一九九四年三月、「五壇法修法一覧」（『福岡大学人文論叢』第三〇巻第一号 一九九八年六月）。
- (5) 『夜の寝覚め』にも中の君の出産にかかわり、「修法五壇」（新編日本古典文学全集巻一一九四頁）の例がみられるが、諸寺それぞれに計五壇ほどの修法を依頼したという内容であり、五壇の御修法とは異なる。
- (6) 註(4)と同じ。

- (7) 註(3) 二二六頁。
 (8) 註(3) 二二八頁。
 (9) 註(4) 森氏の調査による。長徳三年の例は、続群書類従『五壇法日記』六五頁でも確認できる。
 (10) 続群書類従『五壇法日記』六五～六六頁。
 (11) 『日本紀略』後篇一 天慶三年八月廿九日 四〇頁。
 (12) 『日本紀略』後篇四 天徳四年九月廿三日 七九頁。
 (13) 続群書類従『五壇法日記』六五頁。
 (14) 続群書類従『五壇法日記』六五頁。
 (15) 『日本紀略』後篇七 天元四年八月一九日 一四三頁。なお、『五壇法日記』によれば、良源は五壇の御修法の際、中壇を担当している(続群書類従『五壇法日記』六五頁)。
 (16) 『栄花物語』には、院の御所としていた枇杷殿の焼失に際し、三条院が「おぼろけの位をも去り離れたるに、かかるべきにあらず。人の思ふらんことも恥づかし」(『栄花物語』巻第十二「たまのむらぎく」二一八三頁)と述べ懐する場面が描かれる。内裏や院の焼亡は、帝や院にとって自身の不徳を示すものとしてあった。
 (17) 速水脩氏「五壇法」(『呪術宗教の世界―密教修法の歴史―』塙書房 一九八七年 一〇一頁)。速水氏「撰関体制全盛期の秘密修法」(『平安貴族社会と仏教』吉川弘文館 一九八三年)にも詳細が述べられている。
 (18) 松井健児氏「光源氏の御陵参拜」(『源氏物語の生活世界』翰林書房 二〇〇〇年 一三〇～一三一頁)。
 (19) 源氏物語古註釈叢刊『岷江入楚』「明石」二一～一〇五頁。
 (20) 桐壺院の霊の出現の問題は古来より多くの問題を呈している。今までの研究史をふまえて、多角的に検証したものとして袴田光康氏「桐壺帝墮地獄説と『日蔵夢記』―延喜王墮地獄説話と〈聖君〉の論理―」(『源氏物語の史的回路―皇統回帰の物語と宇多天皇の時代―』おうふう 二〇〇九年)などがあげられる。

- (21) 三苦浩輔氏「朧月夜をめぐる光源氏と朱雀帝」(『源氏物語の古代と文学』桜楓社 一九八五年 六五頁)。
- (22) 河添房江氏「朱雀皇権のへ巫女」朧月夜」(『源氏物語表現史 喩と王権の位相』翰林書房 一九九八年 三三八頁)。
- (23) 高田祐彦氏「逆境の光源氏―賢木巻後半の方法―」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会 二〇〇三年 三一五―三一六頁)。河添房江氏も、「光源氏自身に罪の自覚が希薄であることは記憶されておいてよい。色好みの対象を朱雀皇権によって次々に神に緊縛され、隔離された光源氏に、「癖」がいわば本能的、先験的に作用していることになる」(註22)三三九頁)と指摘される。朱雀帝の御世とは、桐壺院の霊はもちろん、光源氏との闘争の御世であることも改めて確認されるといえよう。
- (24) 内田敦士氏「平安時代の仁王会」(「ヒストリア」第二六五号 二〇一七年二月)。
- (25) 註22)三五頁
- (26) 松井健児氏は、藤壺が主催する季の御読経とそこからの藤壺の出家について、「やはりその根底に亡き桐壺院霊の霊威に頼むところがあったからであろう」と指摘される(註18、一三二頁)。
- (27) 高橋麻織氏「弘徽殿大后の政治的機能―朱雀朝の「母后」と「妻后」―」(『源氏物語の政治学―史実・准拠・歴史物語―』笠間書院 二〇一六年 二二頁)。
- (28) 註20)二〇三頁。

付記 本研究は、JSPS 科研費 JP17K13394 の助成を受けたものである。